

第3 問題作成部会の見解

世界史 A

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問は、歴史上に見られた都市の役割をテーマとし、諸地域のそれぞれの都市が世界史上において果たした役割について問う問題である。

Aは、インドとアジアを結ぶ物流の結節点であるマラッカを取り上げ、マラッカの歴史とともに、主要商品の貿易額データから比較すべき項目を選び、中継貿易の特徴を捉える考察力を問うた。

Bは、ロシアのウラジヴォストークに來航した船や人の数を示した表を用い、ウラジヴォストークの役割や特徴について、世界史の知識と会話文の内容、表に当てはまる情報とを関連付ける技能を問うた。いずれの小問も、難易度としては適切であった。

Cは、ベルリンの歴史についてヴァーチャル空間を歩きながら学習する状況を設定し、通りの名前や建物に残る歴史の背景を図版資料とも関連付けながら、ドイツを取り巻く近現代史上の出来事について考察する力を問うた。

第2問

第2問は、人類の経済活動やその評価の変化をテーマとして、世界史上に見られた諸事象について、歴史的事実とその解釈について問う問題である。

Aは、中世ヨーロッパに見られた農業を素材として取り上げ、基礎的な事実を問うとともに、会話文の情報を根拠として、中世ヨーロッパの農業に対する現在の評価について、適切に考察できているかを問うた。いずれの小問も、適切な難易度であったと考える。

Bは、中国の蘇州を素材として取り上げ、地理的条件を含めた都市の歴史的役割やその評価の変容について考察する力を問うた。いずれも適切な難易度であった。

Cは、アメリカ合衆国が出した門戸開放宣言を素材として取り上げ、宣言の内容と評価について問うた。いずれの小問も、難易度としては妥当なものであった。

第3問

第3問は、歴史上見られた「国境線の設定」をテーマとし、周辺諸国の思惑が絡み合い、引き起こされた様々な問題について、その背景などとともに考えさせる問題として出題した。

Aは、インドと中国との国境問題を素材とし、その経緯を説明したネルーの書簡を資料として、中国とインドの国境問題について、その背景等を問うた。いずれの小問も、難易度としては妥当

なものであったと考える。

Bは、二人の歴史家の文章を素材として、ポーランドの歴史に関する知識と、二つの資料から読み取った内容とを関連付けて考察する力を問うた。いずれの小問も、難易度としては妥当なものであったと考える。

Cは、17世紀から19世紀後半までの植民地総督数の変化を題材として取り上げ、この時代における植民地数の変容について、背景や特徴について問うた。

第4問

第4問は、「世界史上の政治改革」をテーマとし、東西の王朝・国家に見られた政治的な出来事を取り上げ、世界史的状況の変化やその歴史的意味、政治的・社会的影響について解答させる問題である。

Aは、1987年に改正された韓国の憲法の前文を取り上げ、この憲法の改正の経緯についての資料読解力と世界史上の憲法についての知識を問うた。いずれの小問も、適切な難易度であったと考える。

Bは、17世紀ごろのパリに住んでいた一市民によって書かれた日記を資料とし、イタリアをめぐるフランス王家とハプスブルク家との抗争を素材として取り上げた。技能を読み取る問題として、適切であったと考える。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

第1問

Aは、問3が、マラッカの中継貿易の実態を理解し、マラッカの中継貿易港としての特徴と後背地との関係性を思考させる良問との評価を得た。今後も、受験者の思考を深められる好適な史資料やデータを提示し、思考を導く問題作成を心掛けたい。

Bは、問4が、意欲的な問題と評価された一方、年号暗記によっても解答できる点に改善の余地がみられるとの指摘も受けた。今後、この点は工夫したい。また、問5が、ドイツ人商人アドルフが逮捕された理由について、歴史的背景から推測させる点で、問6が、当時、朝鮮が置かれていた状況に関する知識を用いて考察する点で、いずれも思考力・判断力・表現力等を問う良問と評価された。また、問6は、会話文の読み取りと歴史的知識を用いて、統計資料を分析させる、思考を促す優れた問題と評価された。今後も、こうした出題を心掛けたい。

Cは、歴史的空間としてのベルリンを頭の中で再構築することを促すような設定が、実際にICTを利用しながら効果的な授業を模索する教育現場にとって参考になる形式であったなど、意欲的な試みとして高く評価された。今後も、意欲的な問題作成に努めたい。

第2問

Aは、問1が、知識・技能を問う良問、中世ヨーロッパの経済に関する再評価を問うことで、受験者に新しい歴史像を示す問題、問2が世界史Aにおける学習内容を活かし、前近代から現代までの自然と人間のかかわりをテーマにして選択肢が設定されている点に工夫が見られると評価された。歴史学上の解釈の変化や前近代の事象が近現代の事象と関連することに留意した問題作成は歴史の面白さを追体験させることにもつながると考える。今後も、このような問題作成を心掛けたい。

Bは、問3が、地図を利用することで、地理的理解を含む包括的理解を問う良問、また問5が、図の名称が記されていないため難易度が高いものの、選択肢に工夫がみられるとの評価を受けた。今後も、このように思考力・判断力・表現力等を問うような出題を積極的に行っていききたい。

Cは、問8が概念的理解を踏まえた上で、歴史的な事象を抽象化させる思考力・判断力・表現力

等を問う良問という評価を得た。今後もこのように思考力・判断力・表現力等を問う問題作成に努めたい。

第3問

Aは、問2が、中国やインドに関する歴史的事象を命題とすれば、中印関係と中ソ関係の因果関係について思考させ、解答を導く良問になったとの指摘を受けた。指摘を踏まえ、今後とも善処したい。

Bでは、問3が、難易度が比較的高かったのではないかと、選択肢の表現を工夫する必要があったとの評価を受けた。また、問4が、ポーランドの国家的性格についての概念的理解を問うことに成功しているとの評価とともに、更なる工夫により、より良質な思考問題になり得たとの評価も受けた。上の指摘に留意し、今後も、知識だけでなく、概念的な理解や思考を問う出題を積極的に行うべきと考える。

Cは、問8が、地図を利用し、アフリカにおけるフランスの植民地領域について地理的理解を含む包括的理解を問うている点が評価された。今後も、思考力・判断力・表現力等を問うように、地図などの資料をより積極的に活用する問題へと出題形式を工夫していきたい。

第4問

Aは、問2が、北米大陸の国やドイツも憲法を資料として提示して比較・検証させるなど、二つの事象により強い関連性がみられた出題にすると、より良い問題になったかもしれないとの指摘を受けた。今後、積極的に工夫した問題作成を心掛けたい。

Bは、問4が、二つの資料・リード文から、16世紀ヨーロッパの中心的概念である主権国家と当時のヨーロッパ諸国の国際関係について概念的理解を問う良問、問5が、二つの命題とも、国際関係の画期に関する文となっている点に工夫が見られるとの評価を受けた。今後も、思考力・判断力・表現力等を問うように、資料をより積極的に活用する問題へと出題形式を工夫していきたい。

4 ま と め

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

分量については、受験者が余裕をもって時間内に解くことができる適切なものであると評価された。今後も、受験者の負担をできるだけ軽減すべく、文章量の適正化に継続して取り組みたい。難易度については、大学入学希望者の学力を測る上で標準的であったとの評価であった。

出題のバランスについては、地域別でみると、「西アジア・アフリカ」以外の全ての地域を対象とし、複数地域に関わる問いも7題設けた（出題率23.3%）。どうしても「西欧・北米」からの出題に偏ってしまうが、地域的には万遍なく取り上げるよう、今後も留意していきたい。分野別においても、「政治史」偏重という従来の状況を些かなりとも是正すべく、「社会経済史」から6題、「文化史」から2題を出題した。時代別に関しては、前近代からの出題6問と、前年度よりもこの方面の設問数を増やしたが、今年度も科目の特性を踏まえて、近現代史を中心とする問題作成方針に準拠したつもりである。

設問形式については、例えばインターネットを活用したヴァーチャルな体験学習の場を想定するなど、現代的で、かつ生徒・学生の主体的な学びの状況を具体的に想起させるような場面設定を積極的に取り入れた。これは、我々の出題意図が大学入学のための考查のみにとどまらないことを示したかったからである。受験者を実際に受け入れる側として、アカデミックな世界がどのようなも

のであるか、また、そこで学ぶのにどのような資質・心持ちが必要かについて、少しでも早く実感してほしいと願い、その機会を提供すべく問題作成に当たった。こうした我々の姿勢を正しく評価いただいたことに感謝申し上げたい。

「世界史A」の問題作成は次年度が最後となる。教科書の記載などに関するご指摘もいただいたが、これまでも、学習指導要領・教科書の記載内容やテーマに即した問題作成に細心の注意を払ってきており、今後も変わらず継続していきたい。これからも、様々な指摘・意見を踏まえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる設問を考案するよう、今後とも問題作成の改善に努めたい。

世界史 B

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問は、世界史上における宗教と政治の関係性をテーマとした。古代中国から東西ヨーロッパを題材として、宗教と政治の関係が歴史に与えた影響について問う問題である。

Aでは、清朝時代の絵画から読み取った情報を基に、この時代に関する文化史上の業績や、清と周辺勢力の関係、また近代以降の藩部情勢を問うた。いずれの小問も、難易度としては妥当なものであったと考える。

Bでは、三十年戦争における政治と宗教の関係性について、異なる意見を資料として用いて、宗教と政治の関係を概念的に考えさせる意図で出題した。いずれの小問も、難易度は適正であった。

Cでは、ブルガリアの民族意識に関する資料の一部を素材として、資料と解説文の読み取りをとおして得られた情報と既習知識を関連させ考察する力を問うた。いずれの小問とも適切な難易度であったと考える。

第2問

第2問は、「欧米列強の進出を受けたアジアやラテンアメリカでの国家」をテーマに、ナショナリズムや他国からの経済的な影響について考えさせる問題を出題した。

Aでは、ベトナム戦争を中心に、カンボジア侵攻と中越戦争を取り上げ、『想像の共同体』の著者ベネディクト＝アンダーソンの視点を素材に、第二次世界大戦後の世界におけるイデオロギー対立とナショナリズムとの関係について、歴史的知識を関連付けて考察する力を問うた。いずれの小問も適切な難易度であった。

Bでは、メキシコに投資した列強諸国とその投資先部門に関する図表や、歴史的イベントを描いた絵画等を用いて、19世紀メキシコの列強との関係の歴史について問うた。いずれも、難易度は適切であった。

第3問

第3問は、「近現代の世界の多様な統治体制」をテーマとし、世界の諸地域に見られる統治体制の変遷やその過程で見られた特徴について考えさせる問題とした。

Aでは、台湾における統治体制の変遷について、アジア諸地域の歴史的事象に関する個別の知識と、台湾の経済成長率に関するグラフや会話文から読み取った内容とを関連付けて考察する力を問うた。いずれの小問についても極端な解答結果は出でらず、妥当な難易度だったと考えている。

Bでは、イギリスの支配下にあったアフリカ南部の人種別人口を示す表を題材とし、イギリスの経済進出や植民地政策に関する知識を踏まえながら、アフリカ南部における各地域の植民地体制の特徴を問うことを意図して問題を作成した。いずれの小問も、適切な難易度であった。

第4問

第4問は、「戦争が政治や文化・生活などに与えた影響」をテーマとし、それぞれの時代に見られた戦争を素材として、戦争の影響や歴史的役割に関する問題とした。

Aでは、フランス王ルイ9世によって行われた十字軍で、イスラーム側の捕虜から解放されて西アジアに滞在したフランス側の人物の記録集の一部を資料として、十字軍の後のイスラーム世界における事象について考察した。いずれの小問についても極端な回答結果は出しておらず、難易度としては妥当なものであったと考えている。

Bでは、『朝鮮王朝実録』を素材として、朝鮮王朝時代の世界史的な背景を含めた事実に知識とともに、会話内の情報を適切に読み取る技能と、歴史的事象についての内容的な理解を求めた。

Cでは、第一次世界大戦及び両大戦間期のドイツを舞台に、塹壕と軍需工場で女性が労働に従事している写真とを資料として取り上げ、戦争と社会の関わり合いについて、総力戦に着目し、20世紀前半のヨーロッパの歴史について基礎的な知識を問うた。難易度は、おおむね適切であったと考える。

第5問

第5問は、「異なる社会や文化の接触」をテーマとし、東西の両王朝を素材として、異なる社会や文化の接触・交流とその影響について解答させる問題である。

Aでは、元王朝の世界史上の位置付けを踏まえ、異文化接触の歴史的な意義やその意味について、その意味を考察する力を問うた。全般的に適正な難易度であった。

Bでは、古代ローマの共和政について、「自由」に対して、ローマ人がどのように捉えていたかを、のちの歴史学者によって書かれた文章を資料として取り上げ、その変容を考察する力を問うた。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

第1問

Aでは、問3が正答以外の選択肢が誤命題であったのが惜しく、藩部以外の地域の歴史を含めた選択肢を置くなどの工夫ができたかもしれないとの指摘を受けた。今後、さらに工夫を凝らして問題作成を行っていききたい。

Bでは、問6が「宗教戦争」に関する概念的理解と具体的な歴史的事象を根拠として考えさせる点が高く評価されたが、知識のみで解答が可能であるという評価もあった。資料をより適切に読解する必要があるような設問になるように、より資料を積極的に活用するよう工夫していききたい。

Cでは、問7がブルガリア民族意識の希薄さの背景となる根拠を、資料と知識を基に判断させる問題として、思考力・判断力・表現力等を問う良問と評価された。今後も、この方向での問題作成に力を入れていきたい。

第2問

Aでは、問3がイデオロギーの対立とナショナリズムをめぐる二つの視点を提示した上で、『想像の共同体』執筆の背景に関する仮説を歴史的事象の知識と論理的整合性に基づき考察させる、意欲的かつ優れた問題と評価された。中間の構成も、問いのテーマとの関連が明瞭であり、小問を追うごとに、中間全体のテーマに問いが収斂されてゆく構成が見事であったと評価された。今

後も、中間テーマと小問との関係を重視して問題作成に当たりたい。

一方、Bでは、問4が「表に示された数字に基づく正誤判断のみならず、その背景に踏み込んだ問いを設定するなどの工夫で良問となるかもしれない」という指摘を受けた。今後、表の読み解きのみならず、その時代背景と関わらせて問うような工夫をすることで、より深みのある問題の作成を目指したい。

第3問

Aでは、問1がイスラーム暦などに関連させると、概念的理解を問えたのではないかとの評価を受けた。また、問3が、設問に工夫が見られ、グラフなどの読み取りと知識・理解に基づく判断が必要な良問と評価されたが、会話文中の生徒の問いを活かしきれていない点が惜しまれるとの指摘もあった。以上の指摘を活かした問題作成に努めたい。

Bは、問4が「自国の植民地以外に経済進出しようとする」ことの類型化の判断を、具体的な歴史的事象の包括的理解を踏まえて思考させる問題として評価を受けた一方で、選択肢に工夫の余地があるとされた。また、問5は、会話文から読み取った情報を表に落とし込む技能を問う良問と評価されたが、白人の割合が植民地の統治体制の違いに影響を及ぼした点に言及するとより良い設問になったとの指摘もあった。今後、このような指摘を踏まえ、方向性は維持しつつも、選択肢やリード文を工夫し、さらに思考力や技能を問う問題作成を心掛けたい。

第4問

Aは、問2が、会話の内容をヒントに、資料を歴史的知識と結びつけていくことで解答にたどりつく、思考力・判断力・表現力等を問う良問との評価を受けた。今後も、資料をより積極的に活用し、思考力や判断力を問うように工夫していきたい。

Bは、問5が、会話文中の説明が多く、解答（秀吉の朝鮮侵攻）を特定するのは容易であったと思われるとの指摘があったが、17世紀前半には他の勢力による侵攻もあり、一定の必要な説明もあったと思われる。リード文での説明が多いことによる弊害は、指摘のとおりである。今後改善に努めたい。

Cは、生徒の対話の場面からの出題形式を採用した点に一定の工夫がみられるとの評価を得た。問9が、資料の内容全体を踏まえた問いを意図したものとして評価されたものの、提示した写真の問題との関連付けについてさらなる検討の余地があるとの指摘も受けた。今後も資料が歴史的な事象の考察の手掛かりとなるような設問に発展させられるよう工夫していきたい。

第5問

Aでは、問3が、中間テーマ全体のまとめとなる内容として、文章の理解に加え、該当する時代の知識と杭州に関する地理的理解をもとに解答させる、思考力・判断力・表現力等を問う良問であり、元代における万里の長城の位置づけについて、新しい歴史認識の視点を提供する、優れた設問であったとの評価を得た。今後もこのような問題作成を心掛けたい。

Bは、問4および問6が思考力・判断力・表現力等を問う良問として、高い評価を受けた。特に問4は、連動問題とすることで、より深い考察を求める問題へと、さらに発展させられる可能性もあったとの指摘を受けた。今後、さらに深い考察を求める問題作成に努めたい。

4 ま と め

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

分量については、試験時間に見合った適切なものとの評価を得た。受験者の思考力・判断力・表

現力等をも測れるような問題の作成に努めているため、どうしてもリード文等の文章量が増える傾向にあるが、受験者の負担軽減を第一に考えて、今後も文章のスリム化を心掛け、問題作成に当たりたい。

出題のバランスについては、前年度頂戴した意見に基づき、地域と時代のバランスに留意した。地域別にみると、今年度も「西欧・北米」と「東・内陸アジア」からの出題が多かったが、「中南米・オセアニア」なども含めて、地域的には万遍なく対象となるよう配慮した。また、時代別では、前近代 14 問、近現代 17 問と、後者に比重を置く出題となった。

難易度については、前年度と同様「大学入学希望者の学力を測る上では適切であった」との評価を受けた。

資料・グラフ等については、資料やデータ等を基に考察することを重視しつつ、グラフ・写真・文章資料など多様な歴史資料を提示することに努めた。また、資料読解に基づく考察や内容の理解を伴う包括的知識を問おうとする問題作成にも努めた。特に後者については、主張や仮説を提示してその根拠の妥当性を思考させるという形式の問題作りに力を入れた。あわせて、受験者が解答することによって新たな歴史像・歴史認識を獲得できるような設問も、積極的に作成した。問題作成部会としては、こうした取り組みを正当に評価していただけたことに対して感謝申し上げたい。

「世界史 B」の問題作成は次年度が最後となる。教科書の記載などに関するご指摘もいただいたが、これまでも、学習指導要領・教科書の記載内容やテーマに即した問題作成に細心の注意を払ってきており、今後も変わらず継続していきたい。これからも、様々な指摘・意見を踏まえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる問題を作りたい。また、資料やリード文から読み取れる情報を基にして、既習内容から得られた包括的・概念的理解を踏まえつつ、論理的に考察し構想することで正答にたどり着く問題を考案するよう、今後とも問題作成の改善に努めたい。